

人名の語構造

田籠, 博
島根大学教授

<https://doi.org/10.15017/8922>

出版情報 : 語文研究. 99, pp.1-10, 2005-06-30. 九州大学国語国文学会
バージョン :
権利関係 :

人名の語構造

田 籠 博

1 小論の目的と方法

先に、某国立大学（当時）の学生5,538人（男3,475人、女2,063人）から得られた男性736、女性380の人名（個人名）をデータとして、その語長および語頭・語末における拍の分布を報告した（田籠2005。以下、「前稿」という）。

語頭に現れないか稀な拍があり、語末にもそれらがあることは予想通りであったが、女性名の語長が三拍までと気づいたほか、いくつか意外な事実もあった。拍の分布と語長に密接な関連がありそうなこと、また、拍の配列において特定の拍結合が繰り返し現れることなどである。単に語頭や語末の一拍だけを観察する方法では、人名における拍の分布を正しく理解できないことを知った。

例えば岩淵・柴田（1964）は「一体に、名前の末尾に、コ・ヨ・ノ・エの音が来ると女の名前になる。」（23頁）とするが、これが無条件に該当するのは三拍の場合だけである。四拍の男性名には「アキヒコ、トシヒコ」があり、一例ながら「シゲトヨ」もある。拍の在り方は語長との関連で考えるべき例である。

タは男性で最多の語頭拍だが、二拍目との組合せは種類が少ない。

タカ 24例 タカオ、タカシ、タカヤ タカアキ、タカノリ、タカマサ ……

タケ 16例 タケオ、タケシ、タケト タケアキ、タケノリ、タケマサ ……

タク 10例 タクオ、タクシ、タクト、タクヤ タクヒロ、タクロウ ……

タイ 9例 タイキ、タイシ、タイジ タイスケ、タイゾウ、タイヘイ ……

タツ 9例 タツオ、タツキ、タツヤ タツノリ、タツヒコ、タツロウ ……

タダ 4例 タダシ タダアツ、タダヒコ、タダヒロ

他は「タスク、タモツ」と「タイチ、タヘイ、タロウ」等である。だとすれば、語頭に拍**タ**が多いと見るよりは、**タカ・タケ・タク・タイ・タツ・タダ**という「拍結合」が多用されると言うべきである。これらの拍結合が **オ・シ・ト・ヤ** と結びついて三拍の、**アキ・ノリ・ヒロ・ヒコ・マサ** と結びついて四拍の男性名となっている。

阪倉篤義氏の『語構成の研究』（1966）によれば、語構成論の方法として記述的な立場による「語構造論」があり、その中心の課題は、

まづ、それらの合成語の構成にあづかつてゐる二つ（以上）の要素が、それぞれ、どのやうな性格の単位であつて、それが、どのやうな機能的、また、意味的な関係において結合してゐるか、といふことを解明しなければならない。（18頁）

と述べる。

小論では、前稿のデータを使用して、人名を二つの単位からなる構成体として説明しようとする。一つは人名の前部に位置する二拍（または一拍）の単位で、これを「名素」とよぶ。もう一つは、人名から名素を除いた後部で、長さは一～四拍と様々だが、これを「名辞」とよぶ。人名は「名素＋名辞」という語構造をもつと仮説するのである。

人名研究はつねに表記の問題と関わり、その束縛の下で行われてきた。小論は、表記とは無関係に、音的特徴の面からどのような知見が得られるかという試論である。

2 人名の単位としての拍結合

人名が一定の拍結合を単位とする語構造をもつことを、四拍の男性名について確認しておく。四拍の男性名421は、例外なく二拍からなる前後二つの要素に分析でき、全部で87種の拍結合が得られる。さらに、それらは

- (1) 前部要素にのみ現れるもの 33
- (2) 後部要素にのみ現れるもの 11
- (3) 前部にも後部にも現れるもの 43

に分けることができる。(1)から複数例あるもの、(2)は全例を示す。

- (1) イッ キミ キヨ キョウ ケイ ケン シュウ ショウ ソウ タ
イ タク タダ テツ ミネ リュウ リョウ
- (2) オキ オミ キチ サク ジン スケ ゾウ ネン ヒコ ヘイ ペ
イ ロウ

(1)は拗長音を含む他、イッ・ケイ・ケン・ソウ・タイ・タク・テツ など字音的である。(2)には字音的な キチ・サク・ジン・ゾウ・ネン・ヘイ・ロウ と和語的な オミ・スケ・ヒコ があるが、いずれも男性名として伝統的な後部要素ばかりである。

(3)のうち計10例以上あるものを（前部・後部）の例数とともに示す。

- アキ(12・24) イチ(1・16) カズ(17・12) カツ(11・3) クニ(10・2)
コウ(10・2) シゲ(7・4) タカ(18・15) タケ(12・1) トシ(17・14)

トモ(13・2) ナオ(11・4) ノブ(14・16) ノリ(15・25) ハル(2・10)
ヒサ(3・17) ヒデ(10・8) ヒト(2・14) ヒロ(17・31) フミ(6・16)
マサ(22・14) ミチ(9・6) ミツ(10・7) ヤス(15・7) ユキ(8・21)
ヨシ(19・8)

全体に和語的で、字音的なのは コウ だけである。前部に多い カツ・クニ・コウ・タケ・トモ、後部に偏る イチ・ハル・ヒサ・ヒト もあるが、多くは前後どちらの要素ともなる。ここで重要なのは、人名にあつては個別の拍の自由な配列ではなく、こうした有限の拍結合が単位となって構成されているという事実である。

前部や後部の要素をなす拍結合は、単に構成上の位置の違いにすぎないのか、それとも上の(1)(2)が示唆するように、人名の語構造における機能と関わるのか、これが次の問題となる。

3 「名素」と「名辞」

ケを語頭とする男性名は、前部要素の拍結合によって二分される。

A ケイオ、ケイゴ、ケイシ、ケイジ、ケイタ、ケイヤ ケイイチ、ケイスケ、ケイゾウ ケイタロウ ケイイチロウ

B ケンゴ、ケンジ、ケンタ、ケント、ケンヤ ケンイチ、ケンサク、ケンスケ、ケンゾウ ケンタロウ、ケンジロウ ケンイチロウ

ほぼ並行的な A B から、拍結合 ケイ と ケン を除けば、三拍の人名から オ・ゴ・シ・ジ・タ・ト・ヤ、四拍から イチ・サク・スケ・ゾウ、五拍から タロウ・ジロウ、六拍から イチロウ が得られる。

拍結合 ケイ・ケン はそれ自身二拍の男性名ともなるが、多くは何らかの後部要素を伴って人名を構成する。これを「名素」と名づける。

名素に添えられて人名の後部要素となる拍結合（一拍を含む）を、人名化接辞の意で「名辞」と名づける。上例の四拍から得られた拍結合で、「サク・スケ・ゾウ」が前節の分類で(2)であり、(3)の「イチ」も後部要素に偏るのは、これらが人名の後部要素として働く拍結合であることを示している。

一拍から四拍までと名辞の長さが一定しないことについては、以下で触れることにする。

4 「名辞」認定上の問題

「名辞」を認定する上での問題を、三拍の人名について検討する。

いま三拍の男女名を [二拍 + 一拍] または [一拍 + 二拍] の構成と仮定し、前節のような方法で分析すると、次の名辞を得ることができる。複数あるものには例数を示す。

【男】

一拍 イ オ²⁵ カ⁵ ガ キ²⁶ ク³ ゴ¹⁰ サ³ シ³⁰ ジ²⁸ タ¹⁷
チ ツ ト²² ヒ ブ² ホ マ⁴ ミ⁶ ム⁹ メ² ヤ²¹
ラ³ リ ル¹⁸

二拍 アキ イチ² サク ヒロ ヘイ ロウ³

【女】

一拍 ア² イ² エ³⁸ カ²⁸ ガ キ⁸ コ⁹² サ⁶ セ ツ ト
ナ⁹ ネ ノ⁵ ホ⁴ プ マ ミ⁴⁵ ム² ヤ ヨ¹⁸ ラ リ¹¹
ル⁴

二拍 アキ イロ サト⁴ スズ ツル ナル ハル² ヒロ ユキ ユ
ミ ユリ レイ

一拍の名辞は、男女間で明らかに異なっている。男性の オ・ゴ・シ・ジ・タ・ト・ム・ヤ・ル、女性の エ・カ・コ・ナ・ノ・ミ・ヨ・リ などである。岩淵・柴田 (1964) の指摘した女性特有の語末拍がこれであろう。

すべての問題を詳述する余裕がないから、男性の名辞 シ の認定、動詞由来の人名の扱い、二拍の名辞を認定する理由、の三点について述べる。

まず、岩淵・柴田 (1964) は、形容詞の終止形のうち、三拍は男性名に、二拍は女性名になると記すが、必ずしも正しくない。語末拍がシである三拍の男性名は、名素の音的特徴により三類に分けることができる。

A エイシ ケイシ シュンシ セイシ ソウシ ダイシ タクシ ……

B1 カズシ カツシ チヨシ ヒデシ モトシ

B2 アツシ キヨシ サトシ タカシ タケシ タダシ ツヨシ……

B2類は形容詞 (の古形) と同形だが、A類はもとよりB1類も形容詞とは関係がない。A類とB1類は、語末拍^ジをもつ男性名が、「エイジ、ケイジ、シュンジ、セイジ」と「カツジ、ヒロジ、モトジ」に二分されるのと並行的である。従って、起源論は別にして、記述の立場からは一律に名辞 シ と認定すべきである。三拍にシを語末にもつ女性名はないから、名辞 シ は男性特有のものである。
(注2)

次に、人名には動詞終止形と同形のものがあり、男性に例が多い。

【男】ク(キズク、タスク、ミガク) ツ(タモツ) プ(シノブ、マナブ) ム

(アコム、イサム、オサム ……) ル(イタル、カオル、カケル、サトル ……)

【女】ブ(シノブ) ム(メグム) ル(イツル、カオル、ミチル)

岩淵・柴田(1964)では、二拍は女性名に、三拍は男性名になるとするが、女性に三拍の例があることは上の通りである。後述するように、男女とも全体として語頭二拍が固定的な拍結合とは言えず、ル 以外の名辞と結びつく例が少ない傾向にある。語構造を統一的に処理しようとする立場から、これらのル をも名辞と認める。

最後に、二拍の名辞は認めないよう努めたが、次の人名から語末の一拍を切り離すには無理がある。

【男】チアキ タイチ、リイチ イサク チヒロ タヘイ シロウ、ジロウ、タロウ

【女】チアキ ヒイロ アサト、チサト、ミスサト、リサト ミスズ チツル
サツキ チトセ チナツ チハル、ミハル チヒロ ミユキ サユリ
ミレイ

女性の「アサト、ミスサト」の場合、「アサコ、アサミ」および「ミスサキ、ミスサコ」から名辞 コ・ミ・キ を認めたのに準じれば、拍結合 アサ・ミサと名辞 ト に分析すべきかもしれない。しかし、名辞 ト は男性特有と考えられるから、二拍の名辞 サト を認めることにした。^(注3)

男性の イチ・サク・ヘイ・ロウ は、前節で述べたように名辞として問題ないが、その他の二拍名辞については後に触れる。

5 「名素」認定上の問題

名素は人名の前部要素として、その主体となる拍結合だが、これは固定的な拍結合をなす自立的名素と非固定的な非自立的名素とに分かれる。

自立的名素の典型は、既述の四拍男性名における分類⁽³⁾、つまり前後どちらの要素にもなる拍結合 アキ・カズ・タカ・ヒロ・モト・ヤス 等である。名素 ヒロ は名辞 キ・シ・ジ・ト・ミ・ム・ヤ と結びついて「ヒロキ、ヒロシ、ヒロジ、ヒロト、ヒロミ、ヒロム、ヒロヤ」という男性名を、名辞 エ・コ・ノ・ミ と結びついて「ヒロエ、ヒロコ、ヒロノ、ヒロミ」という女性名を構成する。四拍の男性名では、前部要素として「ヒロアキ、ヒロカズ、ヒロクニ」など17の、後部要素として「アキヒロ、アツヒロ、カズヒロ」など31もの人名となる。こうした自立的名素が、男女を通じて人名の中心的要素をなし

ている。

非自立的名素は、前節で述べた動詞終止形と同形の人名に認められる。例えば、男性で名辞 ル をもつ人名の語頭二拍は、

イタ カオ カケ サト シゲ スグ タケ ツモ トオ ノボ ヒカ マカ
マサ マモ ミツ ミノ ワタ

であり、このうち サト・シゲ・タケ・マサ・ミツ は自立的で他の名辞とも結びつくが、残る拍結合は ル 以外の名辞と結びついた例がない。四拍の「イッペイ、サブロウ」における名素 イッ・サブ が名辞 ペイ・ロウ に限って現れるのと同じである。名詞に由来する「アカネ、ツカサ、ツバサ、ナギサ、カナメ」などの名素にも同様の性質がある。

なお、名素は原則として二拍だが、一拍の場合も少数ある。前節で二拍の名辞を認めた人名の語頭拍がそれである。

【男】イ(イサク) シ(シロウ) ジ(ジロウ) タ(タイチ、タヘイ、タロウ)
チ(チアキ、チヒロ) リ(リイチ)

【女】サ(サツキ、サユミ、サユリ) チ(チアキ、チサト、チヅル、チトセ、
チナツ、チハル、チヒロ) ヒ(ヒイロ) ミ(ミサト、ミスズ、ミハル、
ミユキ、ミレイ) リ(リサト)

五拍の男性名「ウイチロウ、ジュイチロウ」の ウ・ジュ も同じく一拍の名素となる。名素の長さは一～二拍に限られる。^(注4)

名辞に男女差があったように、名素にも性差があるかを見ておく。三拍で3例以上ある名素は次の通りである。

【男】アキ イサ カズ カツ ケイ ケン コウ シゲ シュウ シュン
ジュン ショウ シン セイ タイ ダイ タカ タク タケ タツ
テツ トシ ナオ ヒサ ヒデ ヒロ マサ モト ユウ ヨシ リュ
ウ リョウ

【女】アイ アキ アサ アヤ イク エミ エリ カズ カナ キミ サ
チ サト シズ スミ タカ タマ トモ ナツ ノリ ハル ヒサ
ヒロ フミ マキ マサ マユ ミズ ミチ ミツ ミナ ヤス ユ
ウ ユキ ユミ ユリ ヨシ

下線を施した共通する名素は意外に少なく、やはり名素にも男女差がありそうである。男性に多い字音的な名素は、女性には稀である。

範囲を2例以下まで拡げ、共通する名素を除くと、男性では イサ・ケン・コウ・シゲ・シュウ・シュン・シン・タイ・ダイ・タク・タツ・リュウ、女

性では アヤ・エミ・エリ・サチ・シズ・タマ・マキ・マユ・ミズ・ミチ・ユミ・ユリ が残り、それぞれ特有の名素となる。男性が字音的で女性は和語的な印象が強く、ある意味で常識的な結果である。

6 名素と名辞の関係

人名の語構成に積極的な機能をはたすのは名辞である。名辞を「人名化接辞」の意だと規定した通り、名辞は単なる拍結合を人名らしく整え、多くは男女差をも表示する。^(注5)

ところが、人名を [名素 + 名辞] の語構造とするには無視できない障害がある。四拍の男性名で同一の拍結合が前部要素にも後部要素にもなり、名素と名辞が区別しがたいように見える事実である。

小論では、この事実を「名素から名辞への転成」として説明する。名素と名辞とは不連続ではなく、名素から名辞へと転成することのある、緩やかな連続関係にあると考える。転成の条件を明確に示すことはできないが、少くとも拗長音や促音・撥音などを含む名素は、名辞へ変化することが稀である。

女性に多い二拍の名辞 アキ・サト・ナツ・ハル・ヒロ・ユキ・ユリ・レイ もこれに準じて説明できる。ただ、全体の長さが三拍までという制約があるため、名素が一拍のときに限られる。要するに、二拍であっても後部要素を名素と認める解釈は採らないのである。

転成の考え方を応用すると、一部の人名が名辞となる事実も説明することができる。男性の「イチロウ、サブロウ、シロウ、ジロウ、タロウ」はそれぞれ自身独立した人名だが、字音的な名素に続く場合、六拍の「ジュンイチロウ、ショウザブロウ」、五拍の「コウシロウ、ジュンジロウ、シンタロウ」といった人名を構成する後部要素すなわち名辞となる。人名としての固定化、形式化が転成の契機になるのだと思われる。

ちなみに、男性特有の名辞 イチ・ゴ・シ (の一部) ・ジ・タ の多くが字音的な名素に続くことからすると、これらは転成名辞 イチロウ・ゴロウ・シロウ・ジロウ・タロウ を起源とする可能性がある。例えば名辞 ゴ に先行する名素は、

ケイ ケン シュウ ショウ シン セイ タイ ダイ プン ユウ リョウ とすべて字音的で、名辞 タ もほぼ同じである。名辞 イチ も一拍のりの他、エイ・カン・ケイ・ケン・コウ・シュウ・シュン 等である。ただ、ジ には和語的な カツ・ヒロ・モト があり、これが名辞 シ と類似する

ことは既に述べた。

7 二拍の人名の特異性

二拍の人名は、女性では20%を超えるのに対して、男性では4%に満たず、全体に占める比率に大きな差がある。また、音的特徴が男女間でやはり異なり、男性には音的特徴の上での偏りがある。次に示すように、最後の「マオ、レオ、テル」を除いて大部分が字音的なのである。

アイ、ケイ、セイ、ダイ、レイ コウ、ゴウ、ソウ、ユウ、シュウ、ジョウ、リュウ、リョウ ケン、ゲン、シン、ジン、シュン、ジュン ガク、タク、ハク、ラク マオ、レオ テル

これに対して、女性には字音的なものは「アイ、レイ、ユウ、リョウ、ジュン」など少数で、三拍の名素とさして異ならない。

女性名について早く林（1957）が「女子の名前などでの単なる音韻の組合せや、外語の語形に似せた音韻の組合せなどの新命名」（121頁）と評したことがあり、特に二拍の場合に同様の指摘がしばしばなされる。例えば次のような人名であろう。

アミ エナ エマ カエ サリ ジュリ セリ マオ マヤ マヨ ミア
ミカ ミミ ユイ ユノ リオ レナ レミ

しかし、小論では、これらの女性名を「単なる音韻の組合せ」ではなく、むしろ [名素 + 名辞] という語構造の原則が、二拍という短い長さの中で働いた結果だと解釈する。その理由の一つは、二拍目（すなわち語末）の拍の分布が、三拍の名辞と同じ傾向を示すからである。

ミ13 ナ8 ホ6 リ6 エ5 カ5 キ5 イ4 オ4 サ3 ヤ3
ヨ3

三拍における一拍名辞の上位を再掲する。

コ92 ミ45 エ38 カ28 ヨ18 リ11 ナ9 キ8 サ6 ノ5 ホ4
ル4

下線で示したように、二拍で十位までの拍のうちの8種が、三拍で十一位以内にある。^(注6)この事実は、二拍の語末拍が三拍と同じく名辞として機能していることを強く示唆する。

二拍の女性名の語頭拍は、

ミ13 マ11 コ8 カ5 リ5 ア4 エ4 サ4 チ4

など、概ね女性名全体の分布傾向と類似する。つまり、二拍女性名の音的特徴

が無意味に見えるとすれば、その要因は名素や名辞自体ではなく、それらが結びついた拍連続の在り方にあり、通常(注7)の和語とは異なるからである。しかし、和語的な「アキ、アヤ、サキ、ユキ、ユリ」も、名素 ア・サ・ユ と名辞 キ・ヤ・リ の構成と解釈すれば、和語「秋、綾、先、雪、百合」との一致は偶然だと言えるかもしれない。

二拍の女性名が、人名の語構造原則を貫いた結果、かえって和語の音的特徴から逸脱しているように見るとすれば、逆に、音的特徴にとりわけて問題がないにもかかわらず、語構造原則から逸脱しているのが男性名である。

二拍の男性名の多くは字音的だが、小論が仮説する人名の語構造原則〔名素＋名辞〕をそこに適用することができない。一音節にすぎない「コウ、ユウ、シュウ、リュウ」や「ケン、シン、シュン」はもとより、その他も前後二つの要素に分析することはできない。一部の女性名もそうである。

名素だけが露出した人名のどこに名辞の機能を見出すべきか、現段階では適切な解釈を見出せないでいる。名辞の機能の一つである男女差の表示は、ここでは語頭拍の清濁に委ねられ、男女に通じる「アイ、ジュン、ユウ、リョウ、レイ」に対して、「ダイ、ゴウ、ジョウ、ゲン」は男性名に限られる。なかで拍**ジュ**（ジュン、ジュリ）が性差に中立的な理由(注8)は、前稿に引き続き不明である。

例外は人名の構成原則の存在を否定しないとはいえ、少なからぬ男性名と一部の女性名が、人名に不可欠な要素である名辞を備えていない事実を説明できないのは、小論の仮説する〔名素＋名辞〕という語構造原則の弱点である。全体に占める比率の僅少さ、あるいは三～四拍の名辞に先行するのが同類の字音的名素であることを考慮すると、これらが人名として安定的でなく、その代償的現象であるようにも思える。とは言え、他に適切な解釈がなければならず、小論では今後の課題として残さざるをえない。

8 おわりに

小論で例示した人名やその分析結果は、筆者が入手することのできた5500人余の人名資料に基づくものにすぎない。世代を無視し、可能性という立場から論ずれば、例外や異論を提出することは容易であろうし、人名に関する議論には往々にしてその観がある。

小論の仮説する人名の語構造の原則が、どれだけ普遍性をもつのかの検討は、別の信頼できる資料を得て行わなければならない。

文献

- 岩淵悦太郎・柴田武（1964）『名づけ』筑摩書房
阪倉篤義（1966）『語構成の研究』角川書店
田籠 博（2005）「人名の語頭音と語末音」島根大学法文学部紀要『島大言語文化』18
林 大（1957）「語彙論」『講座現代国語学』所収

注

- (注1) 入手した人名資料は、本人が漢字表記に添えたカタカナをデータとして抽出した。従って、拍ウは語頭の母音拍である他、多くの場合長音の一部である。このように、必ずしも無関係というわけではない。
- (注2) 使用したデータでは、二拍の女性名にも語末拍シの人名はなかった。
- (注3) 実は、女性の1拍名辞に1例だけ ト がある。これは「マコト」から得たものだが、男性の「アキト、ケント、マサト」等における ト とは性質を異にする と考える。
- (注4) 使用したデータには含まれないが、女性に「サクラコ」という人名がある。この名素は三拍とせざるをえないが、例外的であることは否定できない。
- (注5) 特殊な事例だが、海上自衛隊の艦船で、同型艦は後部要素が同じ艦名で命名される。護衛艦「あさぎり」型は「ゆうぎり、あまぎり、はまぎり」、同「はつゆき」型は「しらゆき、みねゆき、さわゆき」という具合である。潜水艦は「ゆうしお、はるしお、おやしお」、掃海艇は「はつしま、うわじま、すがしま」と艦種や職能の違いが後部要素で表示されている。
- (注6) 二拍の名辞に三拍で最多の コ が一例しかないのは、これが女性名一般の語末拍ではなく、三拍という語構造と深く結びついた名辞であることを示している。
- (注7) 英語的な愛称「リズ、ベス」は、女性名の拍分布の原則（語頭・語末における濁音拍の忌避）から外れるため、現在でも一般的ではない。外国語の影響よりも、日本語としての原則が優先されることを示す例である。
- (注8) 前稿でも述べたが、筆者の人名研究は、語頭濁音忌避の一例として女性名における例を授業で挙げたとき、「ジュンコ」という女性名がなぜあるのか、と質問されたのを契機とする。

(たごもり ひろし・島根大学教授)